

強者の戦略

11月の初めは、学園祭をやっている大学が多いようですが、そのことに気づくのは、たいてい夜遅くに私の住む街の駅に着いたとき、死屍累々と横たわる酔っぱらった大学生の惨状を見たときです。

封印された学部生時代を除くと、学園祭の時期はいつも大学図書館に籠もって論文を執筆していました。大学院生になると鍵付きの個室が借りられるようになるので、ノートパソコンと資料の論文、そして四〇〇字詰め原稿用紙を大量に持ち込んで、原稿用紙に書き散らかした草稿をワープロソフトで一本の筋の通った流れに仕上げてゆくという作業を延々とやっていました。そして目や手が疲れると、学園祭をぶらりと回って気分転換をし、再び執筆に戻り、小腹が空いてくると出店を回り…今考えてみると、この時期に執筆が捗った印象はあまりないです。それでも自宅に籠もるのではなく大学に足を運んでいたのは、実は私なりに学園祭を楽しもうとしていたのかもしれない。

そんな文献講読と論文執筆に明け暮れた大学院生時代の私にとって、一番の悩みが『息抜き』でした。根を詰めて書き続けても、良い文章なんて書けません。事実、頭の中を一度空っぽにしてリフレッシュした方が良いアイデアが浮かんでくるものでした。ですが、提出締め切りが迫る中で脳天気遊び呆けていられるほど、私の神経は凶太くありませんでした。だから、比較的短期間の間、頭の中から論文のことを追い出せる方法がないものかと頭を悩ませて…最終的に辿り着いたのが、散歩と腹筋でした。そこでランニングをしていたら今のようなメタボリックな体型ではなくなっていたのですが、疲れ果ててしまっただけでは執筆に差し支えてしまいますから、適度な疲労感で満足しなければなりません。それでも、散歩のときは1駅分は歩いていましたし（帰りは電車でしたが…）、出歩くような余裕がないときは腹筋を無心にやっていました。その後で執筆に戻ると、さっきまで解決不能に思われていた事柄の解決策があっさり見つかったものでした（それでも駄目な場合は、寝るに限ります）。

大学受験生にとっても、この『息抜き』は大きな課題になるでしょう。入試本番までに力を伸ばさないといけない、でもこれ以上勉強し続けるのは辛い…そんな時は、適度に身体を動かすというのは効果的な対処法だと思います（この文章を書きながら、そう言えば私も高3生の頃はよく散歩をしていたのを思い出しました）。

今回の文章のテーマは『怠惰』なので、もはや息抜きを通り越しています。多くの人にとって、怠惰であることは決して褒められたものではない属性になるでしょう。ですが、私は怠惰であることは才能の一種だと思います。私には、息抜きが精一杯です。

…というのが、いわゆるエッセイです。エッセイの定義を紐解いてみると、「随筆。自由な形式で書かれた思索的色彩の濃い散文」（広辞苑第三版）、随筆は「見聞・経験・感想などを気の向くままに記した文章」（広辞苑第三版）とあります。大学入試の英文読解におけるエッセイの注意点は、2つあります。1つは、エッセイとは論証ではなく共感を目的とした文章であること。もう1つは、論説文とは異なり論理展開（抽象―具体、因果など）が明確でなくても良いことです。「つれづれなるまゝに、日くらし、硯にむかひて、心に移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」と徒然草にもある

強者の戦略

ように、思い浮かんだ事柄をそのまま書き記したのがエッセイなので、論説文に比べて論理的整合性が取れていないものが多いです。事実、私の上記のエッセイ（的なもの）も、段落単位で見ると①学園祭の季節→②私の学園祭の思い出→③息抜きの方法→④受験生へのアドバイス→⑤今回のテーマと、各段落は連想ゲーム的な繋がりしかもっていません。ですが、文章の内容が論理的に破綻しているわけでもありません。このエッセイを論説文として再構成するなら、④は主張に当たり、③はその根拠に当たりますが、①②⑤は単なる連想に過ぎないのでカットとなるでしょう。従って、①②⑤を無駄と見るのが論説文であり、それを味だと考えるのがエッセイだと言うこともできるでしょう。

もう1つ、論説文とエッセイの違いを挙げるとするならば、論証の手法の違いがあるでしょう。論説文とは異なり、エッセイでは精密な論証が必要とされません。今回取り上げた問題を私が「エッセイ的」と言ったのは、実はこちらの理由からだったりします。

それでは、問題を改めて見てみましょう。

問 下線をほどこした部分（1と2）を和訳せよ。

The idea that laziness is the primary sin and the accompanying doctrine of the strenuous life are very prevalent in America, and we cannot escape the fact that America is an amazingly prosperous country. ⁽¹⁾But neither can we escape the fact that society there is in such a condition that all its best contemporary writers are satirists. Curiously enough, most of the great American writers have not hesitated to praise idleness, and it has often been their faculty for doing nothing and praising themselves for doing it, that has been their salvation. Thus, Thoreau, without his capacity for idling and doing nothing more than appreciate the Milky Way, would be a cold prig; and Whitman, robbed of his habit of lounging round with his hands in his pockets and his innocent delight in this pastime, would be merely a large-sized ass. ⁽²⁾Any fool can be fussy and rid himself of energy all over the place, but a man has to have something in him before he can settle down to do nothing. He must have reserves to draw upon, must be able to plunge into strange slow rivers of dream and reverie, must be at heart a poet.

今回も、1文ずつ内容を吟味しながら読み進めてゆきましょう。なお、以下に示してある〈訳例?〉は、生徒がやりそうなミスを取って織り込んだものになっています。この〈訳例?〉を修正してゆく形で話を進めてゆきます（これも前回までと同じですね）。

強者の戦略

〈1文目〉

The idea [that laziness is the primary sin] and the accompanying doctrine (of) the strenuous life are very
 S₁ (S) (V) (C) S₂ V

抽象-具体 抽象-具体

prevalent in America, and we cannot escape the fact [that America is an amazingly prosperous country.]
 C S V O (S) (V) (C)

〈訳例?〉

怠惰が主要な罪で、それに付随する熱心な生活の教義という考えがアメリカで非常に広まっている。そして我々は、アメリカが驚くほど繁栄した国であるという事実を避けることができない。

1文目前半の構造上の難所は、主語の構造です。〈訳例?〉は that laziness is the primary sin と the accompanying doctrine of the strenuous life を並列関係に捉えています。恐らく並列構造の原則をど忘れしてしまったのでしょう。and にせよ or にせよ、並列関係になることができるのは文法上対等な語句同士に限られます。and の前が名詞節で後ろが名詞というのは、両方とも同じ働き（即ち名詞）ではありますが、この原則に反しています。そもそも、〈訳例?〉は the accompanying doctrine of ～も The idea の具体的説明として捉えています。これは無理があります。並列構造の原則に従えば、The idea that ～と the accompanying doctrine of ～を並列関係に捉えるべきでしょう。

1文目後半は、文構造的に難所はありませんが、〈訳例?〉のままだと前半と後半の文の繋がりが分かりません。そこで、文脈に合わせて行間を埋める必要がある。

以上を踏まえて訳例を作り直すと、次のようになります。

〈訳例〉：怠惰であることは大きな罪であるという考え方と共に、精力的に生きるべきであるという教えがアメリカで広く行き渡っている。そして、そんなアメリカという国が驚異的な繁栄を遂げているという事実を見逃すことはできない。

行間を埋めるために私が工夫したのが、「そんな」です。行間を埋める、と言われると戸惑う人もいるかもしれませんが、要するに論理構造を明確にするということです。ここでの私の意図は、1文目の前半と後半に因果関係を示唆することでした。明確に因果を示すのならば下線部のところを「その結果」としても良いのですが、英語が敢えて明示していないことに合わせて、前文との繋がりを強調する「そんな」を追加するに留めています。

他の工夫としては、accompanying を「～と共に、」と訳しています。この語は「付随する、同封の」という意味ですが、この文脈では「怠惰は罪」と「精力的に生きる」がワンセットであることが伝わればよいので、上記のように訳出しました。また、doctrine は直訳すると「教義」ですが、教義とは信仰上の教えとして明文化されたものことなので、「～すべきであるという教え」と訳しています。

2文目に行きましょう。ここからは設問になっている箇所なので、自分の答案と見比べてみて下さい。

強者の戦略

〈2文目〉

But **neither** can we escape **the fact** that society there is in **such** a condition / **that** all its best contemporary writers are satirists.

(v) (s) (v) (O) (S) (V) (s)

文頭否定語による倒置 抽象-具体 原因-結果

writers are satirists. / (v) (c) /

〈訳例?〉

しかし、その社会にはそのような条件があるので、全てのアメリカの現代のベストセラー作家たちは皆皮肉屋であるという事実を見逃すことはできない。

この訳例の何がおかしいのかが分かるでしょうか。the fact that ~にある抽象-具体構造もちゃんと表現できていますし、such-that 構文の処理も問題ありません。ですが、恐らく試験官は「その社会には～がある」から、貴方が答案作成時に感じた戸惑いの痕跡を見抜いてしまうでしょう。ああ、この受験生は「there is ~」の構造に引きずられてしまったのだな、と。the fact that 以下の文構造を正確に把握しておく、society there が主語で「そこでの社会」、文脈に合わせると「アメリカの社会」となります。そしてそのアメリカの社会が is in such a condition 「そのような状況にある」、もちろん「そのような」は前文の内容を表している、意識して「精力的に生きることが求められるような状況である」と訳すと良いでしょう。

全体をまとめると、次のようになります。

〈訳例〉：しかしながら、アメリカの社会は（上述のように）精力的に生きることが求められる状況であるが故に、この国の当代のベストセラー作家たちはみな皮肉屋である、という事実も見逃せない。

3文目に移りましょう。下線部（1）の続きなので、こちらも丁寧に構造を把握する必要があります。

〈3文目〉

Curiously enough / most of the great American writers have **not** hesitated to praise idleness, and **it has often been** their faculty (for doing nothing and praising themselves for doing it,) **that** has been their salvation.

S V O

S (V) (O) (V) (O) (v) (o) V

強調構文

C

〈訳例?〉

十分に興味深いのは、偉大なアメリカの作家の多くは怠惰を賞賛するのを躊躇わなかった。それはしばしば、何もせず、それをすることで自分たちを賞賛する彼らの能力であり、それが彼らの救済だった。

強者の戦略

もはや日本語として意味を成していませんね。京都大学の英文和訳問題は構造把握の難しいものと日本語として意味を成す文を作るのが難しいものの2種類がある、と以前書いたことがありますが、この文は明らかに後者です。と言っても、〈訳例?〉には構造把握エラーも含まれているのですが…。

1つずつ問題点を潰してゆきましょう。まず、それぞれの指示語の指示対象を明確にしてゆく必要があります。確かに、指示対象を明示化すると、指示関係把握エラーによって失点するリスクが生じます。ですが、それは指示語をそのまま「それ」や「そのこと」と訳したとしても、結局減点されるのですから大差ありません。今までに私が京大志願者の答案を採点してきた経験から言うと、むしろ後者の方が悪印象です。〈訳例?〉はまさに後者の戦術を採ったものですが、下手をすると0点になる可能性すらあります。それでは、それぞれの指示語が何を表していたのかを確認してゆきましょう。1つ目のit(～, and it has often ～)は、直前の名詞 idleness「怠惰であること」を表しています。2つ目のit(～ and praising themselves for doing it, ～)は、正確には直前の代動詞 doing とセットで、doing nothing「何もしないこと」を表しています。改めて、**指示語を指示対象を明確にすることなく放置することなどありえない**ということを肝に銘じておいて下さい。

次に、文末の that の処理に着手しましょう。〈訳例?〉では that has been their salvation を関係詞節として「それが彼らの救済だった」としていますが、「それ」を放置するのは厳禁だと言ったばかりです。それ以上にこの訳出が危険なのは、試験官が「関係詞継続用法のつもりで訳しているのかな」と疑念を覚える可能性が高いことです。通例、関係詞の先行詞は名詞に限られます。ですが、継続用法だと先行詞は関係詞の前にある文全体になる場合もあります。〈訳例?〉からは、関係詞の先行詞を何にしているのかが窺い知れませんので、その判断は読み手、すなわち試験官に委ねられることとなります。そして、これは私が普段授業の中で口を酸っぱくして言っていることですが、入試における採点の原則は**疑わしきは罰せよ**です。「私は that を継続用法と解釈していません！」とアピールする答案でない限り、つまり先行詞を明確に示さない限り、大幅減点を受けるのは確実でしょう。もっとも、**この that は関係詞ではなく強調構文の一部**なので、いずれにせよ論外なのですが。

以上を踏まえて訳例を書き換えると、次のようになります。

〈訳例〉: 非常に興味深いのは、アメリカの大作家たちの多くは怠惰であることを賞賛するのを躊躇わずなことだ。そして彼らをしばしば救ってきたのは、何もしないでいることができ、そして何もしないでいることを自賛することのできる才能があった。

4文目に移りましょう。下線部にこそなっていないませんが、文法的には重要な表現が揃っています。

強者の戦略

〈4文目〉

Thus, Thoreau, without his capacity for idling and doing nothing more than appreciate the Milky Way,

S (V) (V) (O)

would be a cold prig; and Whitman, robbed of his habit of lounging round with his hands in his pockets

V C S V' O' (V) (o) (c)

助動詞の過去形をみたら仮定法を疑うべし！

and his innocent delight in this pastime, would be merely a large-sized ass.

O' V C

助動詞の過去形をみたら仮定法を疑うべし！

〈訳例？〉

従って、ソーローは、だらだらして天の川を鑑賞する以上のことをしない能力がないので、冷酷な堅物だろうし、ホイットマンは、ポケットに手を入れながらぶらぶらする癖や、気晴らしの無邪気な喜びを奪われたので、単なる大きな頑固者だろう。

仮定法が見抜けなかった人は、このページを閉じて文法書を読んでください。貴方にはまだこの文章を読む資格はありません。

ちなみに、登場人物のソーロー (Henry David Thoreau) とホイットマン (Walter Whitman) は、いずれも 19 世紀のアメリカを代表する作家です。ソーローは『ウォールデン-森の生活』が、ホイットマンは『草の葉』が代表作として知られていますが…ごめんなさい、私はアメリカの文学に造詣が深くないので、wikipedia に書いてある以上のことは語れません。ですが、ちょっと調べただけで、「ああ、だからこの文脈で 2 人の名前が出ているのか」と納得することはできます。せっかく今ブラウザを立ち上げているのであれば、wikipedia の旅に出てみてはいかがでしょうか。

潜在仮定法さえ見抜ければ、あとは楽勝の筈。訳例は次のようになります。

〈訳例〉：だから、ソーローは、もし怠惰な暮らしをして天の川を鑑賞する以外のことは何もしないでいられる才能がなければ、冷酷な堅物だっただろうし、もしホイットマンからポケットに手を突っ込んでぶらぶらする癖や、気晴らしで無邪気に楽しむのを取り去ったら、単なる図体のかい頑固者だっただろう。

5文目と6文目が下線部(2)となっています。ここまでの流れを掴み損ねていると、訳が無茶苦茶になっているかもしれませんが大丈夫でしょうか。明らかに読み間違えていることが分かっているなら、ここまでの文脈を踏まえた上で改めて下線部(2)に挑んでみることをお勧めします。

強者の戦略

それでは、5文目に移りましょう。

〈5文目〉

Any fool can be fussy and rid himself of energy / all over the place / but a man has to have something in him
 S V C V O₁ O₂ / S V O

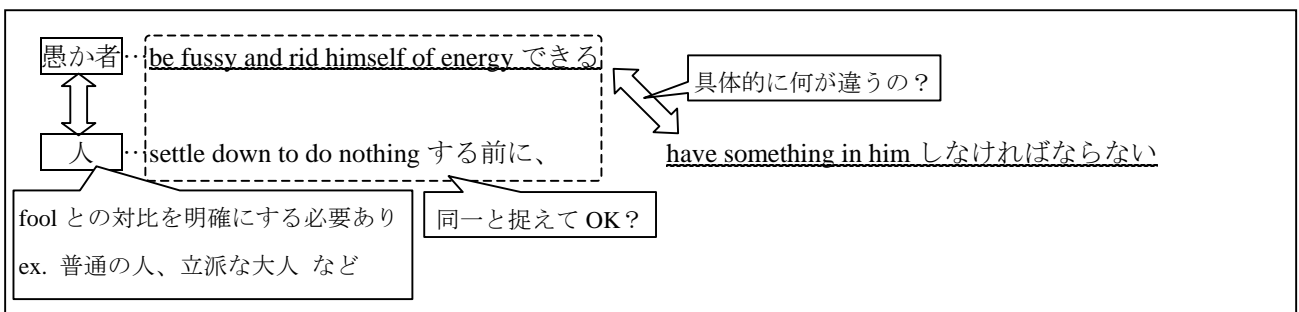
/ before he can settle down to do nothing. /
 S' V' O' /

〈訳例?〉

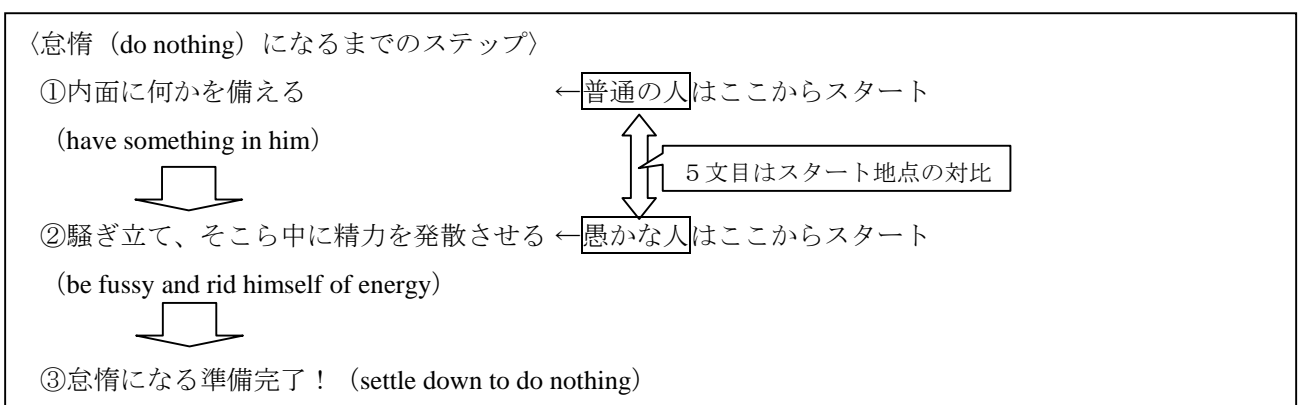
どんな愚か者も騒ぎ立ててあらゆる場所で自身からエネルギーを除去することができる。しかし、人は何もしないために落ち着く前に自分の中に何かを持っていなければならない。

この文も構造的には何の変哲もないのですが、直訳しても全く意味を成しません。表面的には正しいように見えても、文脈に合致しないのであれば別の解釈を探るべきでしょう。

マクロ的な視点でこの文を見てみると、butによる対比関係を明確にしなければなりません。



any fool と a man の対比はすぐに処理できるのですが、述語部分の関係性が分かりにくい。正直に言って、私にも正確なところは筆者に聞かないと分かりません。ですが、私自身の経験を基にして解釈を提示するならば、次のような関係性になるのではないかと思います。



私の冒頭のエッセイ (もどき) は、この解釈に説得力をもたせるためのものだったのです。それでは、訳例です。

強者の戦略

〈訳例〉：愚かな人は、騒ぎ立ててそこら中に精力を発散させることができるのだろうが、立派な大人は、無為の生活を行えるようになる前に、自分の内面に何かを備えなければならない。

最後の6文目に挑みましょう。

〈6文目〉

He must have reserves/to draw upon/ must be able to plunge/into strange slow rivers of dream and reverie/
S V O / / V / /
must be/at heart/a poet.
V / / C

〈訳例?〉

彼は頼りになる備えを持たなければならず、奇妙にゆっくりした流れの夢や幻想の川に飛び込むことができなければならず、心の底から詩人でなければならない。

直前の文 a man has to have something in him before ~との繋がりを考えてゆきましょう。まず、6文目の He は前文の a man のことです。そして6文目の「has to have」は「must have」とパラフレーズ関係にあります。更に、論説文であれエッセイであれ、通例、抽象→具体の流れは尊重されます。以上の状況証拠から、6文目は something in him の具体的説明になっていると考えるのが妥当でしょう。

もう1つ注意して欲しいのは、6文目の3つの動詞がどのような関係にあるのか、です。〈訳例?〉では must have reserve、must be able to plunge、must be を並列関係と解釈していますが、and がないのに並列関係と判断しても良いのでしょうか。もし並列関係であるならば、この文は3つの異なる事象を述べていることになりませんが、本当にそうでしょうか。

私の解釈は、こうです。

〈立派な大人が怠惰になるためにすべきこと〉

• have reserves to draw upon
(頼りになる備えをもつ)

抽

• plunge into strange slow rivers of dream and reverie
(奇妙にゆっくりした流れの夢や幻想の川に飛び込む)
• be at heart a poet
(心の底から詩人であること)

具₁

具₂

頼りになる備えの正体は、ズバリ「詩人の心」!

このように捉えると、6文目の論理的関係がクリアになります。文法的にも、カンマは「抽象」**具₁**を**具₂**を表すことができるので、今回は抽象—具体関係を表すカンマが連続していると考えれば、私の解釈は正当化できます。

強者の戦略

以上を踏まえて、訳出を試みると次のようになります。

〈訳例〉：つまり、立派な大人は拠り所とする備えのようなものを持たなければならず、それは不思議なゆっくりとした流れの夢の川や幻想に飛び込むことを可能にするもの、すなわち心の底から詩人であることなのだ。

やや攻めすぎな訳出ではありますが、勝負をかけるならこのくらい大胆な訳の方が良いでしょう。

以上で各文の和訳は終了です。最後に、全体を俯瞰しておきましょう。

怠惰であることは大きな罪であるという考え方と共に、精力的に生きるべきであるという教えがアメリカで広く行き渡っている。そして、そんなアメリカという国が驚異的な繁栄を遂げているという事実を見逃すことはできない。しかしながら、アメリカの社会は（上述のように）精力的に生きることが求められる状況であるが故に、この国の当代のベストセラー作家たちはみな皮肉屋である、という事実も見逃せない。非常に興味深いのは、アメリカの作家たちの多くは怠惰であることを賞賛するのを躊躇わずなことだ。そして彼らをしばしば救ってきたのは、何もしていないことができ、そして何もしていないことを自賛することのできる才能があることだった。だから、ソーローは、もし怠惰な暮らしをして天の川を鑑賞する以外のことは何もしないでいられる才能がなければ、冷酷な堅物だっただろうし、もしホイットマンからポケットに手を突っ込んでぶらぶらする癖や、気晴らしで無邪気に楽しむのを取り去ったら、単なる図体のかい頑固者だっただろう。愚かな人は、騒ぎ立ててそこら中に精力を発散させることができるのだろうが、立派な大人は、無為の生活を行えるようになる前に、自分の内面に何かを備えなければならない。つまり、立派な大人は拠り所とする備えのようなものを持たなければならず、それは不思議なゆっくりとした流れの夢の川や幻想に飛び込むことを可能にするもの、すなわち心の底から詩人であることなのだ。

エッセイを読み解く難しさは、主張の根拠が必ずしも客観性を備えていないことに起因しています。論説文であれば客観的な証拠を基に論証を組み立てる必要がありますが、エッセイは筆者の主観性が尊重されるため、筆者の経験から得られた帰納的な結論を主張することが許されるのです。私が「エッセイとは論証ではなく共感を目的とした文章である」と述べた理由が、これでお分かり頂けたのではないかと思います。

それでは、今回はここまで。また次回、頭がよじれるような難問で貴方を悩ませたいと思います。